山岳医療に関する医師養成事業　発足式・研修会

山岳医療に関する医師養成事業・山岳 JMAT（山岳医療救護チーム）の発足

２月 27 日（土）に岐阜県医師会館で開催した「山岳医療に関する医師養成事業・山岳 JMAT（山岳医療救護チーム）発足式」では、小林博岐阜県医師会長のあいさつ、堀部廉岐阜県医師会常務理事の事業説明後に、山岳 JMAT 隊旗が大橋宏重隊長（朝日大学歯学部附属村上記念病院長）に授与された。石井正三日本医師会常任理事、石原佳洋岐阜県健康福祉部長の来賓祝辞では、課題をいち早く取り上げたことへの感謝と本事業の意義が強調された。

発足式後は、医師の他、警察、自衛隊、消防等から約 140 名の参加を得て、「第 1 回山岳医療に関する医師養成研修会」を開催し、御嶽山が噴火した際、現場で救護活動に携わった医師や警察官の講演が行われた。会場からは情報収集の重要性等が提言される等、山岳医療に取り組む強い意気込みが感じられる船出となった。

なお、本事業を進めるに当たり、「山岳医療に関する医師養成協議会設置要綱」を定め、２月 11 日（木・祝）に岐阜県医師会館で開催した「第 1 回山岳医療に関する医師養成協議会・役員会議」において、次の事業を進めていくことを確認した。

1　山岳医療に関する研修会の開催
2　山岳事故防止及び山岳地特有の傷病についての啓発
3　山岳 JMAT（山岳医療救護チーム）集結場所、医療救護本部及び応急救護所設置場所等の調査
4　山岳事故で使用する資機材の整備、取り扱い訓練の実施
5　山岳地での総合訓練の実施

写真　左から小林博　岐阜県医師会長、大橋宏重　山岳 JMAT 隊長

第１回山岳医療に関する医師養成 研修会
『御嶽山噴火災害を振り返って』

日　時	平成 28 年２月 27 日（土）午後２時 00 分～午後４時 20 分
会　場	岐阜県医師会館　６階大会議室
出席者	136 名 医師 69 名、歯科医師１名、薬剤師３名、看護師・医療従事者２名、 行政５名、消防 35 名、警察４名、報道９名、その他８名

第１部

（午後２時００分～午後２時１５分）

山岳医療に関する医師養成事業発足式

次　第

総合司会　岐阜県医師会　常務理事　野川　秀利

１　開会の言葉　岐阜県医師会　副会長　川出　靖彦

２　挨拶　岐阜県医師会　会　長　小林　博

３　事業説明　岐阜県医師会 常務理事　堀部　廉

４　岐阜県医師会・山岳ＪＭＡＴ隊旗　授与

５　山岳ＪＭＡＴ隊長決意
朝日大学歯学部附属村上記念病院 院長　大橋　宏重

６　来賓祝辞
公益社団法人日本医師会 常任理事　石井　正三
岐阜県健康福祉部 部長　石原　佳洋

７　閉会の言葉　岐阜県医師会 副会長　河合　直樹

第２部

（午後２時１５分～午後４時００分）

第１回 山岳医療に関する医師養成研修会

次　第

１　基調講演

『日本医師会における災害医療の取り組み』

講師：公益社団法人日本医師会 常任理事　　石井　正三

講師：日本医師会総合政策研究機構 客員研究員
九州大学大学院医学研究院
先端医療医学部門災害・救急医学助教　永田　高志

２　シンポジウム

テーマ『御嶽山噴火災害を振り返って』

座長：岐阜大学医学部附属病院 病院長
岐阜大学大学院医学系研究科救急・災害医学分野 教授　　小倉　真治

（１）火山災害と山岳事故における医療従事者の必要性について
下呂警察署　巡査長（尾崎警察官駐在所）　平田　　純

（２）濁河温泉登山道でのＤＭＡＴ活動
高山赤十字病院 医療社会事業部長　浮田　雅人

（３）御嶽山噴火災害に対する木曽医師会の活動報告
木曽医師会 救急災害担当理事　原　　亙助

３　総合討論

４　閉会

基調講演・シンポジウム 関係者 略歴

講　師

公益社団法人　日本医師会　常任理事

石井　正三（いしい　まさみ）

弘前大学医学部卒業。
弘前大学附属病院脳神経外科、いわき市立総合磐城共立病院脳神経外科医長を経て石井脳神経外科・眼科医院理事長。
いわき市医師会会長、福島県医師会副会長を経て、現在　日本医師会常任理事。

講　師

日本医師会総合政策研究機構 客員研究員
九州大学大学院医学研究院先端医療医学部門災害・救急医学 助教

永田　高志（ながた　たかし）

九州大学医学部卒業。九州大学医学部附属病院麻酔科蘇生科、聖マリア病院、ハーバード大学公衆衛生大学院武見プログラム留学、八女発心会姫野病院救急総合診療科部長を経て現職。
海外における災害での医療支援活動や、国内においては、福岡マラソン危機管理アドバイザー、第 23 回世界ジャンボリー大会危機管理アドバイザー等に従事。
国際危機管理者協会公認危機管理者（日本人初）

シンポジウム　座長・パネリスト略歴

座　長

岐阜大学医学部附属病院 病院長
岐阜大学大学院医学系研究科 救急・災害医学分野 教授

小倉　真治（おぐら　しんじ）

岐阜大学医学部卒業。
香川医科大学麻酔・救急医学講座、客員研究員アメリカ合衆国サウスキャロライナ医科大学生理学講座、香川医科大学附属病院救命救急センター副センター長・助教授等を経て、現職。岐阜大学医学部附属病院高次救命治療センター長及び同病院高度救命救急センター長兼務。

パネリスト

下呂警察署　巡査長（尾崎警察官駐在所）

平田　純（ひらた　じゅん）

平成２４年下呂署地域課配属、平成２５年４月　山岳警備隊飛騨方面隊入隊。
平成２６年９月２７日、御嶽山火山災害における当日の避難誘導、救助活動、
その後の捜索活動に従事。

高山赤十字病院 医療社会事業部長

浮田　雅人（うきた　まさと）

自治医科大学卒業。荘川村国民健康保険診療所所長、自治医科大学予防生態学教室助手、高山赤十字病院第１内科副部長を経て現職。
御嶽山噴火災害時にはＤＭＡＴ隊として活動。

木曽医師会 救急災害担当理事・医療法人原内科医院副院長

原　亙助（はら　こうすけ）

独協医科大学第一内科臨床助手、英静会森病院内科医員、慈泉会相澤病院消化器内科医員等を経て現職。
御嶽山噴火災害時は木曽医師会として検案業務などに従事。

朝日新聞
DIGITAL

山岳ＪＭＡＴ発足　全国初

2016 年 2 月 28 日 21 時 56 分

全国初の山岳専門の災害医療チーム「山岳ＪＭＡＴ」の発足式が２７日、岐阜市であった。戦後最悪となった死者・行方不明者６３人を出した２０１４年９月の御嶽山（岐阜・長野県境）の噴火災害を教訓に、県医師会が作った。より迅速で丁寧な医療を目指し、山岳災害の専門知識を持った医師の養成を始める。

「岐阜県が課題を取り上げて立ち上がってくれ、新しい山岳医療体制がここから始まる。国も期待を寄せている」。発足式のあいさつで、日本医師会の石井正三・常任理事は、山岳ＪＭＡＴの意義を強調した。

御嶽山の噴火災害では、発生時の医療体制の課題も浮き彫りになった。発足式後のシンポジウムで、御嶽山のＤＭＡＴ活動に参加した高山赤十字病院（高山市）の浮田雅人医師は「装備や山の知識・技能が必要」と述べた。また、北アルプスの活火山・焼岳（岐阜、長野県境）にも触れ、「赤十字病院で噴火の机上訓練をしたが、関係機関が連携した訓練はまだできていない。顔が見える関係を作っておくべきだ」と訴えた。

山岳ＪＭＡＴは、医師や看護師ら５人ほどで構成。ＤＭＡＴが災害発生直後から４８時間以内をめどに現場で活動するのに対し、山岳ＪＭＡＴはＤＭＡＴから負傷した被災者らを引き継ぎ、救護所などで医療や健康管理などにあたる。

隊長には朝日大学歯学部付属村上記念病院（岐阜市）の大橋宏重院長が就任。活動の幅を広げるため、専門を問わず実際に現地で活動できる医師５０人ほどを集めたい考えだ。

災害現場やふもとでの医療、生死の確認などに加え、被災者の心のケアなども想定。火山性ガスなどから身を守る防毒マスクやピッケルなどの装備を準備し、登山家を招いての山岳訓練や高山病の研修会もする。

県内には、御嶽山や焼岳に加え、アカンダナ山、乗鞍岳、白山の５火山を国が常時監視している。県健康福祉部の石原佳洋部長は「噴火や雪崩など、いつどんな災害が起きるかわからない。一人でも多くの命を救い、二次災害もなく活動できるように連携していきたい」と話した。

毎日新聞

山岳事故対策

岐阜県医師会がチーム発足

2016年2月27日　19時06分

後最悪となる６３人の死者・行方不明者を出した２０１４年９月の御嶽山の噴火災害を踏まえ、岐阜県医師会は２７日、避難所などで医療や健康管理を行うチーム「山岳ＪＭＡＴ」を発足させた。山岳事故の現場で適切な処置ができるよう、専門医の養成事業も始めた。全国初の取り組みという。

医師会によると、中高年層の登山ブームなどを背景に山岳事故が増える一方、応急手当ての遅れから容体が悪化するケースもある。適切な処置で被害を軽減するのが狙い。

岐阜市での発足式で、初代隊長に就任した朝日大歯学部付属村上記念病院の大橋宏重院長は「山岳医療に精通する医師は少ないが、事故時には幅広い役割が求められる」と医師養成の必要性を強調した。

医師会は今後、研修会や実技訓練を通じ、山の特徴や防毒マスクなどの使用方法を学んでもらう。さらに、治療の優先順位を付けるトリアージ、遺体検案などが担える医師を増やしていく。【岡正勝】

岐阜県医師会の「山岳ＪＭＡＴ」隊旗を受け取った大橋隊長（右）＝岐阜市で２０１６年2月２７日午後２時８分、岡正勝撮影

岐阜新聞Web

山岳医療に強い医師を　御嶽噴火教訓、県医師会が養成

2016 年 02 月 28 日

御嶽山（岐阜、長野県）の噴火災害を受け、岐阜県医師会（小林博会長）は山岳地帯の現場でも医療活動ができる医師を養成する。酸素が薄かったり、足場が悪かったりする過酷な地でも適切な医療を施せるよう、実地訓練も行う計画。医師会による山岳医療の医師養成は、全国初だという。

中高年の登山者が増えるにつれ、山岳事故件数も増加。医師は搬送された患者に高山病や低体温症、脱水症などの治療はできるが、大規模災害時には現場入りするケースも想定される。ただ、変わりやすい天候など山には特有の条件があり、医師にも山の知識や経験、登山技術が求められるため、現場対応できる医師は非常に少ない。

県医師会は今後、希望する医師に山岳医療や救急医療、登山の専門家を講師に研修をしたり、山で防毒マスクを付けた実技訓練を実施する計画。２７日に岐阜市薮田南の県医師会館で行われた発足式で、小林会長は「海難のＪＭＡＴ（災害医療チーム）はあるが、山岳はない。山岳ＪＭＡＴをつくり、研修したい」と意気込んだ。

式典に続いて開かれた第１回の研修には医師約７０人のほか、警察や自衛隊らから計１３０人が参加。御嶽山の噴火災害で救助に向かった下呂署の平田純巡査長や、高山赤十字病院の災害派遣医療チーム（ＤＭＡＴ）で活動した浮田雅人医師らが体験を語った。

山岳医療の医師養成事業の発足式であいさつする小林博県医師会長＝岐阜市薮田南、県医師会館

YOMIURI ONLINE

県医師会　山岳医療向上へ事業 2016年02月28日

２０１４年の御嶽山（長野・岐阜県境、３０６７メートル）の噴火を受け、県医師会は２７日、山岳医療に対応できる医師を養成する事業を始めた。現場に赴く「県医師会山岳ＪＭＡＴ（日本医師会災害医療チーム）」の発足式を行った。医師会による取り組みとしては、全国初だという。

県医師会によると、高山病や低体温症など山岳地でかかる病気の知識について、各医師は持っているが、酸素濃度が低く、勾配がある山岳地で実際に治療行為を行うことは難しい。登山医学の専門家でつくる日本登山医学会が山岳医を認定しているが、県内に認定医は少ないという。

県内には北アルプスなどの山岳地があるため、県医師会では、山岳地での治療技術の向上を図ろうと、今回の事業を始めた。２０１６年度末までは座学が中心で、１７年度からは山岳地で研修を行う計画だ。同事業で養成した医師から、県医師会山岳ＪＭＡＴのメンバーを選んでいく。

この日、初めての研修会には、県内外の医師約７０人のほか、警察、自衛隊などから約６０人の計約１３０人が参加。御嶽山が噴火した際、救助活動に携わった警察官や医師らが講演した。

県医師会山岳ＪＭＡＴの初代隊長に任命された朝日大歯学部付属村上記念病院の大橋宏重院長は「岐阜県は山の国でもあり、多くの登山者が訪れる。山岳事故に対応できるチームの編成に力を尽くしていきたい」と力強く語った。

山岳ＪＭＡＴの隊旗を受け取った大橋・朝日大歯学部付属村上記念病院長